

薬草園について

日本の園芸技術の発展は もともと 薬草栽培から始まっている
きれいな花が咲いたり、突然変異で葉の色や形のおもしろいものができる
特にそれを育てる工夫をして それが観賞植物に専門化したのが園芸である。

江戸時代 幕府が奨励して どの藩も 朝鮮人参等 漢方薬を栽培していた。
しかし なかなかうまくできるものでもない。朝鮮からの輸入に頼っていたの
が現状。金と同じ価値で取引されていた。

出雲、山陰の方で栽培に成功し、一時価格が下落したが これは薬効が少なく
依然として朝鮮半島からの輸入に頼らざるを得ない高級品であった。

(現在宍道湖の大根島で 朝鮮人参の栽培が有名で 現在の朝鮮人参の本物も
大根島が輸出し 漢方に加工し逆輸入の状態となっている。江戸時代からの研
究が成功した例)

岩国藩では 時代によって 場所が移動しているが、

1 享保年間には 吉香茶室の近くの土手下にあった。

2 (萬徳院の下におかれたこともあったが未確認)

③ 万谷御門の(開花亭の近く)番所に隣接してあった。

図面の森脇家は薬草園を開くため 他へ移築させられている。

御薬園は 御典医の中から管理責任者が選ばれ管理された。

藩主およびその家族や関係者を治療するのに必要な漢方薬を入手するため、

朝鮮人参の栽培実験するため利用された。

勿論不足する 生薬は購入され漢方薬として調合された。

幕府は地方大名の監視のため いろいろな報告書を求めていることは周知のこ
とで、1727年 岩国の 飯田道周が 植物のことを 江戸へ報告した記録
がある。

その他 初成りもの(瓜 や なす等)を献上した話、

スイカが 最初に出てくるのは 朝鮮通信使の先触れが柱野に来たときの記録